



鹿島紀行
名の御堂
完

中村俊定文庫
文庫 18
361





三三三

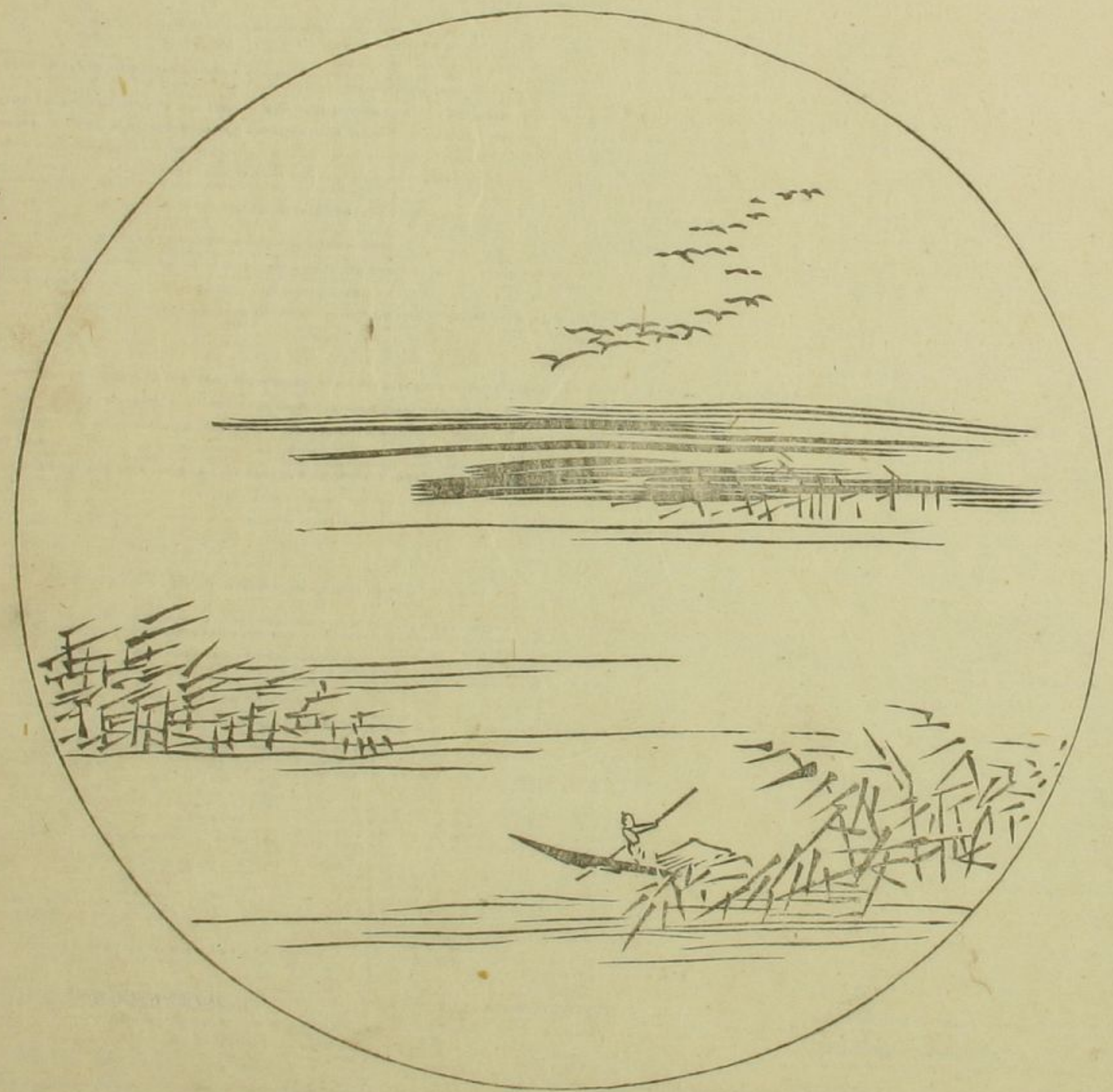
此秋を布衣の何とて加へて人々の衆を合へ
 誰あはるよやう御座る中條をむくまはらう
 満月の月野心のまじくまじくまじく
 心をよめくくくくくくくくくくくくくくく
 香取の秋深はたの秋かゝくかゝくかゝく
 ささくささくささくささくささくささくささく
 日影さめぬささくささくささくささくささく

三三三



雪舟の山水は、自然の美を追求し、筆墨の濃淡で情景を表現した。この巻は、舟の静寂と自然の雄偉さを描いた名作が数多く収録されている。

雪舟全巻江



乙卯のうさ牛内多於眠はけれ予
 多々庵まあそふ折しと麻沔山月
 尺せとやと歌は備さきくこの
 竹もく〜思きん〜とす〜又為〜此
 也れとさ〜中〜とやと〜此れ
 求光と傳をいさう〜とあるの
 尺と〜と〜とと〜乃と〜
 つかは〜と〜折持より〜紙は〜

艸抄し〜あきれ〜出〜り杖と〜
 芝

蓼太

西本松

いつもの林もやと色紙の糸河十とい
 河下と〜すれ〜松も今〜一本出で
 汗交〜し〜

系〜ら乃組〜し〜明〜り松の林
 十人の月えれなや松印〜り

^釈 求光

蓼太

汗涇夜泊

低〜る多〜時〜は〜津〜秋の宿
 冨飯外〜と〜渡〜る〜月〜宿

眠江

求光

鎌谷系

鏡波くさくさ糸のちる和菜れを 蓼太

はくそ祢や花中よ身せり揚河 眠江

同りの僧れりよまたりやれ

とこれ一遍昭紙らよと紙とわり 蓼太

本丸頼船

借りれ漕舟の秋よ寐そる 求光

じーの音やあうり尻を叶せり 蓼太

芦のあれ管いしやうり高時音 眠江

眠江亭

お撰とり男幾人屋乃林 蓼太

八束枝乃奥和方よよあ月の 求光

徳目寺

庭ふ乃古き法喜よ竹掘のやうり本
さうりくちりりくちりり枝あひら
かんの地盤のよめすく結縁のやと
いしをやうりえあけらして

庭より本和幹よお靴よ細もから 蓼太

隈とくしつし四門の月うし

求光

麻鴛舟中

十四夜より空ろくろむとくす此日影
陸よりかやさきまの月なる夜せむ
山奴といふ女もろくろ小足川より麻鴛
舟とつくとし濑子の沖をたふ浦程ある
山に入江と名をたはひ何々の魚とるま
目別あまのり

あうくくと目とくく鮭の細代外

求光

息栖法樂

磯より川の石執り悲潮井と名はく
備あり付はせしとくく清水を流ふと
あまのり

とくか舟乃和きや波と水の月

夢太

麻鴛社頭

くみ備る月や舟のこまつく
恙う代や兜の角と麻よん
松より一は連は働く考かつ
治るく日の本松よ月乃もと

求光

眠江

山奴

夢太

要石

きよとさやいりてはたのげぬく

求光

廉清崎

林の空定うききこゆるひよりあすたをきき
ききかたはあすの朝の山よりかきこゆる
あすたよりあすの朝の山よりかきこゆる
あすたよりあすの朝の山よりかきこゆる

管毎紙祓代乃宿し月見介

蓼太

行管しぬ漕ぬるく月見介

求光

あ月や路乃をねえ文くゆく

眠江

あ月や氷しり凍る臭乃き

山奴

香取遥孫

十六日と波風あつては祓洋ハゆきと
りきりく

あーおし心茶乃香を物とまたり

蓼太

官山子

花

六



子安山下

花の落葉とさや麻の影

夢太

月と尾上乃雲と夕風

眠江

冥にれちいさいお涙のこぼる

求光

おらととむくは雨のころら

山奴

潮あうと一麦あいのゆり

唯我

雲とさきとく

太

岩宿

ウ

鬢よりの高き玉ひく玉分寄
我士乃はくは只かこす
質よりゆく内やころの嵐野
表と共居と神に月より
伽羅よりと裂葱の香にかの時
いけりち更と鼻とよき
十念より伏え乃出船より
祇よりと是具乃茶とと眼と

江 光 奴 我 太 江 光 太

ナ

如こる連とゆきと腰にけ
入舞まんとあをぬふ別
里と今ぬと花乃と月と
梅草と愛乃かありと
穿とけと耳乃藤治と蛇と
節遠擲より夕日何く
亭とと暮とさうと朽と麻柱
親より見乃速くける

我 奴 江 光 太 我 奴 江

端を月さくぬも又心しく
畠は紅乃祿くさるゆ
病の中へ定々麻ねる風か
托を移ひて西名の歌立
長明を思ふもしく金巨燈
をいぬよりまの東山
の骨うそさくもゆの影を
きぬといふかあるものハ何

光 奴 我 太 江 光 奴 我

かるくといふは原のま
そ乃東内川々ふう
ぬ、星たよりもたぬ
春人を名進る味も入
そ〜ぬは〜せ〜むら
燕を了る旅乃吉日

太 江 我 奴 光 筆

東武文通

名月や兼工勝りさう砂浜 白牛
 名月乃影やま地の一軒軒 かし
 名月や價の外乃るぬ一夜 這平
 名月や交く定ぬくぬ此言 蓼且
 田畠と世違り月のとるり 如雷
 名月や仲まハ紅乃暮ふとら 機石
 名月や野山と人乃りり 南羅

名月や五尺の垂と為軒 花明
 名月ややまからぬとる一人 五全
 水底のゆとるりぬくぬ月 都雁
 名月風とふくく葉もやまの月 萬言
 名月文一人あさささささ 鼠膜
 名月や思拵入りとみやこも 風齋

右

雪中花のぬをれはさあみつとけ一無らぬ
 春の文とてやまの文とてはるりの
 法とてはるりの月の子はるりの

下総

任かす月頼と跡とを唐小

小見川 楚調

錦吹花織扇をそとく唐の風

小見 唯我

風流く木の葉に灰を千る小

大寺 山奴

か之月と顔かとも忘や梅のむ

燕里 玉芥

あゝの葉よりうさふ月や赤と白

布金 李蹊

旁の月や三井より唐田に雪のま

飲田 歌來

清なり也帯よ六歳叔を草とけ

河玉川 唄舟

此菊吹散やうき世にまわれ馬

小見 採去

兼葑く篠の暖歌を扇りて

井内 眠江

上総

見かす月頼と跡とを唐小

吏仙

湖より白きふらりや山さくら

雪岡

むらゝるや白帷子れ時り

花上

ゆきこの日や所く晴き海の上

六渡

初そとわらひよりけし村とあ

雪簑

雲白く空も張く水空に

砂川

家くの傳受ありくやを我

御風

望とく一膳りや山を

路上

山の隅や遠く一差れ八を楢

柗花

るる雲く入や佛の別り

山紫

掃くせく又一輪の牡丹ふ

吐月

奥羽

水筋乃雪ふ形くぬ昔のぬ

福島 等鯉

新橋とくいよつれりるを

出羽 警窓

繁くの葉は冷きかしく

吾林

信州

池ふよりきく結く枯葉のぬ

東漣

ゆめをくをきりく出雄の

志水

麻一ツ林のかくく枯葉のふ

渡柗

武州

おのむらうたうのまき柳のぬ

村山女 仙衣

相州

空庭も月のまぶしき花の影

法句 難半

北越

子猫刈て後予うゝの氣き不

歌中 麻父

十た秋や今あそくそてんも宿

カ 素菌

卯の舞や下りて宿るる路も一

五十一 桃路

駿州

山明や水りて移る床はしら

本會 梅畠

あつらふれや無のち井も碓もい

耳平

けしられあきてはうゝ極のう舞

雁砂

同

魚の月満しや仇の弱む人

府中 鐘山

淋しき涙石かきくも婦くつ

金危

碓くくも夜をなへ秋のけき

乙兒

骨經の付山をゆりそつ月か

子來

是る時心とりゆきと様をい

居逸

菊花若る忘忘一の網代守

琴馬

秋風や地をハ轉々極々京

竹工

史何々々々々々々々々々々々

蘭府

あうあう々々々々々々々々

兀子

同

三々々々々々々々々々々々

嶋田
大耳

淋々々々々々々々々々々々

千婦

所啼々々々々々々々々々々

殘馬

星見々々々々々々々々々々

素郎

あのみん々々々々々々々々

茶來

垣差々々々々々々々々々々

山這

場所や夕日々々々々々々

樂補

芋々々々の亭々々々々々

画江

同

川隈々々々々々々々々々々

讀取
麻介

波々々々々々々々々々々々

古江

和歌集 卷之七

雪乃白くしるさけしけとめら御を

大賦

鶯の鳴や市川を渡る鳥の日の暮

燕波

鶯の鳴やあきの代にうらみ

白鴉

川を渡る鳥の鳴はあきの暮

千潮

川を渡る鳥の鳴はあきの暮

子窓

雪乃白くしるさけしけとめら御を

左文

松の影はあきの代にうらみ

雪隨

秋の風はあきの代にうらみ

塘瓜

同

雪乃白くしるさけしけとめら御を

真津

曙山

雪乃白くしるさけしけとめら御を

百朶

雪乃白くしるさけしけとめら御を

雪文

雪乃白くしるさけしけとめら御を

蓼雨

三州

初霧の白くしるさけしけとめら御を

千代舎

和菊

雪乃白くしるさけしけとめら御を

蝶羅

尾州

梅よりとこをいと穀と初春

ナヤ

木見

逢坂乃里ふらふらり初さう

南空

林の川や壺森と相の松より

也百

とさよとく男めくは松柳が

紀來

訪よりゆきなめてはあき物より

八亀

とより中やむいの表もけ秋

里英

踏あくと幾つ居るを田植は

以之

同

くもつさ乃系くはよや林の色

佐谷

吟山

控く見く水首おむかす

寄潮

勢州

涼さや硯の中は砂の音

山田

麦浪

とららら改唇よ如く時を

如之

空扇よりくきくくあり啼か

温故

出ー入を縁の中や後の月

二日坊

大和

家川系の池とよか来て時を

古山

浪蕪

たのまのまゝ積るや晴れ海
のわらゝハ極よぶるもの死州の家

馬明
旅人

近江

を備へ帆のそる秋の千々
あふハよここまてんを名初時

栗津
文素
可風

洛陽

目のまののまゝ人々も
はああハソウ出るものそり月
りりるれとる踏る也まあ
二三人急病の情もほろろ
おくの比翼やあゝあゝ
かゝる子啼わとらけは
崩落うゝとらけは

山只
麦柳
子鳳
花汐
歩月
文下
賈隠

川狩や日と吸着し入る

有止

ほうしりや吹礼りた大井川

振鷺

を音や梅さく川のほろり

友鷗

踏んくちあしの曠や雛祭

白翅

梅うらや安さ萩乃をうけ

鷺片

形好いのさ梅ゆきも草外

芦一

春とすこ鹿しゆり二月

蛙水

まことの市吹思く今物の状

慎車

花さくし月乃枝やを花

左蘭

とく蘇も茶さうかまねく喉より

牛東

いきり火乃伸くひる秋の香

百示

梅り香紙かりく吹く柳こふ

桃鏡

能くさくをさけうらや茶吹子霞

夜光

加藤

七

森くやんるふ秋ふぬり春柳
 水成ゆく湯もめしうくや州
 世腹といふぬ中や西風 夢
 晴く目の外たぬを雀外
 世乃春乃祖々のゆり小鮎外
 互乃新秋能ふもさ一秋外
 みく秋子移るぬ中やと心雲
 酸ものの勝はふとくくうれ

眠我
 九水
 宜中
 野菊
 荆雨
 家義
 指月
 枝真

晴くくくく春乃春乃春乃の春
 家くくく人の心く秋をくふ
 和けや川とくき松くりくは夏
 下宮や水子屋の奥れ 壺所
 石はるく信念は門のつく外
 うくく村くくく海を頭外
 酒乃ふいふとくきく水桜川

菟路
 史軺
 敬雨
 眠花
 竹壽
 瓶村
 松亭

山崎乃岩物々々ありて

柳波

月影如顔と二人新たき

持衣

さらさらも涼し心奪や風車

如風

ゆふゆふと藤咲秋夜花

暮風

そり流れわたりぬ水六巻く

藤文

麻の若山とあらむあき風の

思風

山崎川的りて枯か

雅調

中空乃雲動と和麻の

芭夕

く川午也さも地菊乃二葉より

底花

細や乃ちりてを

傘車

畑とらりて

燕角

田と水と水と個々り村に

寄山

ゆらゆら乃心

馬雲

埋ちと身と根とを

山水

避暑

まろくろくははともあれ林の風

心祇

あまのくろくははともあれ月日八重一菊晶

鳥酔

舞のあまのくろくははともあれ和曠月

秋瓜

きろくくろくははともあれ川を畔ハ枯るる

班象

清少はまははともあれはるちとくろくは

泉鳴

まのまのくろくははともあれはるちとくろくは

葛木

権佛や糸つゝ女の寺まろくは

嵐亭

あまのくろくははともあれはるちとくろくは

拾翠

長因寺

少徳を升空する人 藤原の御子 一帖
初めの句をかく 印は 藤原の御子
京都の月 山をみれば 玉章の御子
藤原と深き 藤原の御子
のうらみ 藤原の御子
あふく 藤原の御子

宝曆九年己卯菊月



